

騎士道精神とイスパニヤ文学

一 色 忠 良

I

樹木、岩石、山岳、河川、動物、人間といった各種の点景と生き物のなかに配在する各様の人物がある。こゝイスパニヤの土地に眼をすえる時、その全体のなかに、ひとつの群像を見出す。意気揚々たる騎手をその背に乗せた、さつそうたる騎馬の群がそれである。

イスパニヤ文学は、由来、写実とユーモアがその主潮となっているのであるが、これを経糸と見れば、神祕主義文学などとともに、騎士小説は、緯糸としてイスパニヤ文学史の特長を織なしていると見てよからう。

騎士小説は、騎士道精神からくる一個の文学的所産であることは、いうまでもないが、ひとしく偉大にして光輝にかざやく騎士の群といつても、あるものは回国放浪の徒であり、他のものは宮仕えの人士であり、また、あるものは正気であり、他のものは狂気だったりだし、ある時は高尚典雅の気品がたゞえられるかと思えば、時を変えれば残忍無情の場面を現出したりする。聖者あり逃亡者ありで、正義の器も、時に追いはぎに身を変じたりするのである。

ともあれ、鉄の武具で身をかため、剣をおびて立つ一群の人物像、それは一見して識別されるところで、イスパニヤ文学の一断面をのぞかせて、他のヨーロッパ文学を画し、なにか深刻にして永遠の相を残しているかのようなのである。

イスパニヤは、事実、もつとも忠順で熱情的なヨーロッパ諸国民のなかのひとつとしてその特性をそなえ、強じん執ように現在にいたるまでも、往古の勇壮高まいなる叙事詩的尚武の精神を保持してきている。10世紀、11世紀および12世紀におけるカステリヤの叙事詩を生んだ思想と感情の結果は、その後の詩的表白をとおして、中世紀のあいだを生きのびて近代に至り、代々に時代的傾

向とし好を取り入れ、いよいよ新しい型態のなかに、叙事詩的伝統の返り咲きを遂げんとする。ごく近くは、1936年にはじまる内乱中、世界の人々の眼前で、数多くの、彼らのいわゆる殉教者的と観念する英雄たちの血を流して、その国土の上にくりひろげられた悪夢のような戦闘と行動のなかからも、古くさく、かびが生えていると思われていた叙事的武勳物語歌につながる胴体が認められたはずである。あらたなイスパニヤ詩人の胸の高鳴りを、国土の自由と独立のためにたち上つた統領 (caudillo) とその兵士たちの英雄的いさおしの賛歌を、そして、さらに深い宗教的感動をよびおこした内奥の声を、昔の武勳物語歌をものした名もなきイスパニヤの古人たちとともに、思い出さざるをえまい。そういうところから、20世紀におけるイスパニヤのいわゆるロマンセーロの所在も、おのずと定められるものがあるといえよう。

古い武勳物語歌から、ロマンセーロの重要な部分が、今世紀において、いかにして生れたか。また、近代のれい明期にさかのぼっては、いかにして、そこから国民劇が生れて、ロマンティシズム時代に叙事詩的騎士道精神が再び芽をふくに至るかを検討するなら、そこからわれわれが判断しうることは、ヨーロッパの諸国民中イスパニヤほど、真に国民的文学を、常に叙事詩的文学を、そしてまた、騎士小説を生んだ国民は、ほかにはあるまい、ということである。

確固たる、不断の基盤としてイスパニヤ文学がもちつゞけてきたものは、民衆英雄的なその詩歌である。それは、十分に民衆を感動さすに足る貴族的芸術であると同時に、社会的上層の心を吸引してやまぬ民衆的芸術であつた。この国の歴史において、もつとも深刻な国民的危局に立たされた過去を案ずるに、——他の国においても、おなじ例が見られなくはないが——民衆と貴族階級が理想を同じくして、全く不離不即の場をつくっている顕著な歴史的事実が見られ、そこに上記の理由の背景に肯かれるものがあると思ひる。

「イスパニヤ本来の叙事詩はそのまゝ民族詩ということとなるが、そのわけは、それがすべての人の詩であるからであつて、作り手 (autor) と聴き手 (oyente) と語り手 (recitante) のそれぞれのものが、一つの詩のために一体

の形をなして協力することを惜しまなかったからである。」と、かつて国立図書館長の職にあり歴史家、文芸批判家として令名のあつたメネンデス・イ・ペラーヨも説明している。引用のついでに、こゝで、1856年にベルリンで「ロマンセの最盛期とその成果」なる一書を、コンラード・ホフマンと共著で出している著名なドイツのイスパニヤ文学者フェルナンド・ホセ・ウォルフが云っていることをも付け加えると、「イスパニヤ文学のもっとも独創的で特長的な宝庫であるロマンセーロは、騎士なる人のために作られた騎士の詩であつた。」ということであり、マヌエール・デ・モントリウもまた、これと全く意見をおなじくして、「歴史的進展の全体から考えて、イスパニヤ文学のもっとも重要にして独創的な地帯は、騎士のために騎士によって作られたる文学である。」と断定している。

この騎士 (caballero) の概念は、実は、イスパニヤ民族にとっては、すでに伝統的なものとなつてついでのもので、教養層にとっては、意識的にながらえてきたところのものなのである。戯画の形で、しごく空想的な語りぐさをしるしている二人の作家、バルタサール・グラシアン (1601—58) とマテオ・アレマン (1547—1614?) の手になる「うるさ型」と「グスマーン・デ・アルファラーチェ」のなかに、それぞれ相似た個処があるので、それをひろつてみると、——イタリヤに着くなり鼻高々と客分の身におさまった靴屋があり、さつそく、その国の言葉で、*Se tutti siete cavalieri, chi guarda la pécora?* (あんたがた、みんなが騎士というんなら、いったい、どなたが羊をみるんだい。) ときくのである。そして語をついで、イスパニヤ人はな、みんなが高貴の人だつてことよ、と説明すれば、イタリヤ人は、*Signore, in Spagna chi guarda la pécora?* (すると、あんた、イスパニヤでは、だれがいったい、羊をみるんだい。) と問いかえしてくる。そこで、くだんのイスパニヤ人の答えていわく。「イスパニヤではな、他国のように畜生も下衆もないのさ。イスパニヤじや、みんながみんな貴族なのよ。」

イスパニヤは、事実、その文学のなかで、たえず騎士道の理想にむかつて忠勤であつたことを示しているのだが、あらゆる不運に立ち向い、あらゆる災や

くにめげず、ごう居不屈の仁俠の士として、正義の擁護者として、この上ない強情さを発揮する彼のドン・キホーテも、かいぎやく的屈折をまじえつゝ、古い騎士道の叙事詩的英雄だましいにつく、いわばイスパニヤ文学の頑強なレジスタンスの反映にはかならないのである。

真にイスパニヤ的、独創的と称しうる文学的ジャンルは、と云えば、前にちよつと触れ、後段でも述べるロマンセーロであり、国民劇であり、神祕主義文学であり、また悪党小説であるのだが、その代表的価値のとおり、ドン・キホーテのなかには、騎士道精神に加えて、それらそれぞれの要素が蔵されていることは、知らるゝごとくである。

人間の、ある心の傾きをあらわす表象的人間像として、イスパニヤ的性格から創造されたいかなる文学的人間の典型があるかといえは、それは、悲劇的英雄エル・シッドであり、フェルナンド・デ・ローハスの「カリストとメリベア」の悲喜劇」中に出てくる老婆ラ・セレスティーナであり、ガルシーア・オルドーニェス・デ・モンタルボの手になるアマディースであり、イスパニヤ社会の生んだ特殊な愛すべき悪党エル・ビカロであり、またドン・キホーテであり、ドン・ファンであろう。このうち「アマディース」は、1508年の出版で、騎士小説の代表作といつてよい。騎士道精神を証してわれわれに見せてくれるものは、無論この国の文学史の上にはとゞまらぬ。もし、歴史的実在の世界にイスパニヤだましいを具現している曲型的人間をたずねるならば、それは、前記せるエル・シッドの名で知られるルイ・ディアス・デ・ビバルを別にしても、エル・グラン・カピタンあり、エルナン・コルテースあり、ガルシラーソあり、ロペ・デ・ベーガあり、サン・フランシスコ・ハビエール（ザベリヨ）ありサン・イグナシオ・デ・ロヨラあり、サンタ・テレーサ・デ・ヘスースまた然りである。

歴史的現実の場において、われわれが見る騎士の相は、エル・シッドにあつては下臣として、エル・グラン・カピタンにあつては統領として、エルナン・コルテースにあつては新世界の征服者として、ガルシラーソにあつては詩人として、ロペ・デ・ベーガにあつては劇作家として、サン・フランシ

スコ・ハビエールにあつては伝道者として、サン・イグナシオ・デ・ロヨラにあつては聖者として、しかしてサンタ・テレーサ・デ・ヘスースの、げにも雄々しきたましいにあつては神祕家として顕示されている。そこで、イスパニヤ文学の上での作品や作家に新しい評価の眼、つまりあらゆる時代のイスパニヤ社会の思想と感情の基底につながる表現上の類別とか、価値判断という段になれば、この騎士のタイプは、なかなか有効な役目を果すかも知れないのである。そのきざしは、すでにあるので、黄金世紀のイスパニヤ文学に精通しているドイツの著名な歴史家プファンドルによって着々進められている。

ともあれ、騎士のタイプは、イスパニヤの国民的意識の重要な中心的位置を占めていることは、否定しえないところである。前に引用したウ・ルフの言葉を、再び借りると、「イスパニヤ人は、めいめいが戦士であつた。めいめいの戦士は、高貴であつた。しかして、高貴なるひとりのイスパニヤ人は、祖国イスパニヤの騎士であつたのである。」民衆的な騎士の観念が、この言葉によつても想察されると思う。

さらに、付け加えなければならないことは、イスパニヤ文学の黄金世紀において、騎士道の理想とイスパニヤだましいの同一化を早め、その発展の道をたどる結果、当時のキリスト教的信仰に没入してゆく姿が見られることである。すなわち、騎士の性格、態度、観念のなかに、キリストの受難とか、聖体とかの玄義が、とゞこおることなく吸収包摂されていく成長の相と、精神的自己統合と完成化の形が認められるのであつて、わが国の場合であれば、ちょうど禅的修業と武士道精神の接合一致も思いあわされないことはなかりう。

文学の上にこれをたずねると、ロベ・デ・ベーガは、十架上のキリストを、傷つける一個の勇敢なる騎士と見るということになる。

¿Quién es aquel caballero,
Herido por tantas partes,
Que está de expirar muy cerca
Y no le socorre nadie?

(処きらわず傷をうけ、

息引きとらん今わの時、
彼の騎士果してなにびとぞ、
救い出ださん人もなき。)

聖体についてはまた、人の眼より逃れんとする騎士としてのキリストを見るのである。

Caballero disfrazado,
Aunque más disimuléis,
No digo yo que os verán,
Mas que os han de conocer.

(こよなく巧くつくろえど、
姿を変えたる騎士なるぞ、
見破らるゝとは云わざれど、
あまねく知らるゝことならん。)

II

エル・シッド・カンペアドールその人が生きたのは、1026年から1099年までで、イスパニヤの叙事詩の最古の記念物である「エル・シッド」が出来あがったのは、普通、それから約40年後と見なされている。

貴族階級に統治されていた当時の社会のなかで、序々にその勢力を伸長しつつあったのが、特別の軍人よりなる執政団であった。戦いによって、その階級的地位が向上していったことはいうまでもない。へいぜい、若き戦士たちは、あるいは警護に出、あるいは常時君主について、その供に従ったに相違なく、彼らが、板上に坐し、宮殿や城さいに眠り、ろくをもらって、生涯、忠誠を守ったであろうことは、おそらく、他の国々における当時の様子と余りへだゝるところはあるまいと想像されるが、こゝにおいては全く、任意の契約に頼る独特の人間的相互関係とでもいゝうるつながりであつたらしい。つまり、ごく素朴な意味で、主従間の武事についての間柄は、そのまゝ君主と人民との間のひ護、忠順という崇高で、自然的な感情に置きかえて理解されてもいゝものであ

った。往時、騎士たちは、武具を身につけ、騎馬で戦場へおもむくのが常であったが、彼らには、また、供すなわち従者が添うのがならわしで、その者は騎士の身を守らんと、ひいては主君のためにならんと、好き勝手に寄り添うてくる者たちであった。

民衆的英雄詩が、戦いを称賛高揚することはいうまでもないが、それはあらゆる徳行のうち、勇猛と果敢と、忠誠心と犠牲と、また、危険をものともせず身をていする雄々しさと、死を寸前に控えてさえも、あわてず、驚かぬ沈着をば、第一等の位置におくのである。

血統、純血、それに国家の名誉と栄光、——これらのものは、いまだ市民道徳が生れず、いわんや民主的モラルも現われていなかった当時、高貴なるものに誇りをもつ戦士たちの一挙手一投足を動かす理想であったのであって、自治都市の自由と権力の出現を、その後に見ることになる。

さて、物語歌の口伝が、年月とともに伝説などを形成していく過程を考えれば、その重要性は見逃しえないのであるが、それらの集積から、混とんの期をへて、英雄詩の創造の機が生れると思考するのは、理由のあるところで、その形式や内容が容易に発展、転化するものをもっているかどうか、大事な点に相違あるまい。

死後わずか40年程にして、民衆的叙事詩のなかに歌いこまれた、かの歴史的人物エル・シッドも、たとえば、14世紀にひとりの無名詩人が、その壮大な事業についてつづった武勲物語歌のなかでは、事実、伝説のなかに埋没されてしまっているかのごとき感を覚える。

およそ、民衆的英雄詩を考察するに、卓越非凡な人間なり、性格なりを着想し、これを生み出すものは、英雄の存在と、その活動、事績であることは、論をまたない。そして、彼らの少年時のことになると、いずれの国におけるもおなじこと、相似た点が見出されるのである。すなわち、ある時期における厳格酷烈のしつけとか、自己教育などによって、武人としての素質や指揮能力や宣ぶの才などが発現されていったことである。エル・シッドもまた、そのような英雄のなかの第一人者である。彼の父ディエゴ・ライーネスは、ゴルマース伯

からうけたあだを復しゆうせんものと念ずるが、すでに寄る年波で、みずからの手でそれを果すことの不可能なるを悟り、四人の息子をひとりづゝ呼んで、自分の望みを果してくれるように、心中を打ちあげ、それを受けいれしめるしに、力いっぱい息子たちの手の指をかむ。上の三人の子供たちは、親のその所行に悲鳴をあげ、不平をこぼす。が、いちばん年齒のいかぬシッドは、あだうちの念を燃して、父ディエゴ・ライーネスに、おん身に代ってやつに一撃を加えましょう、と誓うのである。父は無論、満足して、彼こそわが家に侮べつを与えたものに対する復しゆうを仕遂げてくれるのだとやってよろこぶ。——こゝにあらわれるシッドは、実は、他の三人の兄たちと腹を異にする庶子であるが、これもヨーロッパのほかの国々の叙事詩によくあることのようにである。

それぞれの民族の叙事詩に出てくる英雄はまた、どんな肉体的苦痛にも堪えるほどの我慢と怪力の持主であるのみならず、思わぬ災やくを前にしても、絶対に冷静沈着を失わない度胸の持主で、物に動ぜぬ面のなかに、躍動的な印象をとどめている。苦痛を眼のあたりにして、英雄たちのもつ、この心の静ひつは、たとえば、「ラーラ王子らの武勲」のごとき古詩のなかの人物が身をゆだねる涙や悲嘆や絶望にくらべると、著しく対照的のように思われる。大胆と勇氣と、名誉への喝望などのほかに英雄たちのものになっていた身上は、かん智であり、粘着力であり、着実さであり、雅量であり、また、寛容であつたらう。

では、女性が英雄の生涯のなかにあらわれて果す役割は、どうであろうか。概していえば、それは両極の立場で出てくる。すなわち、光明の天使か、悪魔としてである。これも、いずれの民族でも、余りかわるところがない。ギリシヤ神話に例をとれば、オディセイの貞淑な妻ピネロツピやエディポの娘アンティゴナに対するアルセステ、旧約では、自分の種族を虐殺から救った女王エステルに対するアハブ王の放らつな妻イゼベルやサムソンを裏切った妻デリラなどがそれであつて、イスパニヤの民族詩のなかでも、ドニャ・ヒメーナやドニャ・ソールやドニャ・エルビーラのごとき貞女がいるかと思うと、他方に

は、ガルシ・フェルナンデス伯を病床に捨ておいたまゝ、一フランス人と恋の逃避行をし、遂には、そのフランス人の娘から共に殺されることになるドニャ・サンチャのようなかん婦もいるというものである。

戦いのことになると、どの国民的叙事詩にあつても、多かれ少なかれ、同じような技法で描かれているようである。戦争の詩は、昔の詩人たちに、ほとんど同じ感情、同じ物の見方から、感じられかつ見られて歌われたものゝごとくである。古代印度の叙事詩「摩訶婆羅多」と「イリアッド」、フランス最古の叙事詩「ロランの歌」と「エル・シッド」(わがシッドの歌)とは、それぞれ相通ずるものがあるといわれている。すなわち、戦闘に先だつてする全能者への祈願、統領たちの激励鼓舞の雄弁、戦士たちのあげるときの声、戦場に巻きあげる砂塵、わたり合う剣撃の音、落馬する戦士たちのからだ、戦い終つて戦野におき去られ、血しぶきの付いた数々の武具、など……。

往古の社会の文明を特長づける族長的性格は、統領と戦士たちのつながりの場のなかに、もっとも明らかな表現を読みとることができようが、こゝにいう統領 (caudillo) は、イスパニヤ民族の性格的産物と思考されるもので、彼は、下臣にとっては長であり、また父でもあつたわけである。

このような權威を有する族長の意味が、古い叙事詩に出る偉大な英雄の多くのものに表わされているのである。シッドもまた然りであつて、彼は実に、戦士たちのなかの族長であり、族長のなかの戦士だったのである。前記統領と戦士たちとの関係は、忠誠と信頼でつながれたじん帯で、全くの自由意思によつて、それに従い、時に放棄されることもあつたようである。このことは、やがて封建的なきずなが、愛と同情とによつて維持されていった先驅を意味しよう。ともあれ、ひとたび君主が勝利のために戦いを開始し、その輩下はそれぞれ主上のために戦場にのぞむということが、大きな社会的約束として成立していくことになると、信頼にこたえる人間として、助力者として、統領によつて選ばれた彼ら戦士たちの忠誠心によるつながりが、どのようなものであつたかは、ほゞ察知しうるのであつて、彼らはすべて、統領を中心に、真に一家族を形づくっていたもので、「エル・シッド」のなかでも、輩下のものはみな、まこ

との兄弟として、まことの父のごときその統領に対しているのである。

口碑の原始的叙事詩にあつては、その精神的環境を考えるに、後見者とか、養育に当るもののもつ役割は、きわめて重要だつたと考えられる。すなわち、上流家庭の子弟教育にあつては、その父親は、輩下のなかから、そう明にして学才ある古老を選んで、これに当らせるのが実状であつた。「ラーラ王子らの武勲」に出るヌーニョ・サリードなどは、その役割を果しているといえよう。このような人物には劇的興味がそゝがれる場合が多いのである。

民衆的英雄詩のなかでお目にかゝる他の人物は、従者であろう。もちろん、ヨーロッパ文明が、騎士盛行の時代に入つてからのことにくらべれば、比較になるまいが、ともかく、叙事詩の作者たちは、回国の騎士が現われる処には、必ずといってよいほど、かつ好の従者をそえている。彼は、才気にたけ、あらゆる手段計略をよくする人物である場合が多く、したがつて、時に、その主人の生命を危機から救つたりしている。18世紀の騎士小説に出てくるシフェールの従者リバルドも、それである。英国にもその例があつて、古い民謡にその名も高い、弓の巧みな伝説的義賊ロビン・フッドのそばには常にリトル・ジョンがついていた。

ところで、忠誠心や高貴性が高揚されるころ、その反面には、虚偽とか卑劣とか裏切りとかいった背信行為が招来されるのも必然であろう。裏切者が英雄の代役に回つたりして、それが詩人の腕にかゝると、水際立った人物として描かれるに役立つこともある。アラビヤ人のイベリヤ侵入を助けたドン・フリアンなどもその例である。

英雄詩において感興をさそうと思われる感情的要因のひとつとしては、復しゅうがあつた。それは、たゞに本能的満足を充すものだけではない、個人の権威からくる感情によつて、与えられた義務を果すことであり、また一門の名誉にかゝわることもあつた。それは、昔の人たちには血の負債と考えられていたのである。だから、どこの国の民族詩にも、恐ろしい復しゅうの話があるのである。前記の「ラーラ王子らの武勲」や「エル・シッド」もその例にもれず、前者には、ムダールなる男のあだ打ちが生々と散文的に描写されて

いる。後者についてはすでに述べた。

Ⅲ

以上述べてきたところによって、大体ながら、イスパニヤの歴史をたどって、騎士道文学の系譜のはじめにさかのぼり、その発生当初に英雄たちに着取ることのできる特長的な性格形成の因子を理解することができると思う。歴史家によっては、英雄詩と騎士道詩を分けて時代的区分としている向もあるが、要するに、英雄に代えるに騎士を以てすれば、民族的背景のなかのイスパニヤ的文学すなわちロマンセの大体の姿がうかび上ってこよう。もつとも、一層厳密にいうなら、個人めいめいが、民族の声に絶対的態度で耳を傾け、血の命ずるところに従って、民族愛か国民的感情ないしは、本能か個人的激情かに訴える以外の理想は、これを有しないという人生観に支配されたものが、英雄詩であるとするなら、他方、騎士道詩は、血とか民族とかのきはん束縛を脱し、各個その権威からくる良心を人間に付与するという新しいおきて、あらたなモラルの影響のもとにでき上ったものだとすることができる。このおきて、あるいはモラルとは、もちろん、キリスト教のそれなのだが、これがために、各自の靈性にみがきかけられ、戦争の渦中にきずかれてきた古い社会の慣習を見る眼は、創造の主から出た最上の動物と見る人間観からすれば、しごく、野蛮なものに観念せしめたのであった。そこにはじめて、靈化された女性、つまり、すべての弱きものの生けるシンボルと、人間生活の理想にまで引き上げられた婦人に対する儀礼の心が芽生えるわけである。英雄変じて騎士となり、勇士代りて紳士となるのである。

実際、イスパニヤの古い時代の文学を、前に述べた二つの区分で考えることは、妥当でないかもしれない。というのは、英雄詩と騎士道詩の二つの潮流は、ひとつになって流れておるのであって、混とんたる神話、伝説のなかにも現われかねないような往古の英雄的人物の雄大なる野性を、簡単に分離して考えることはむずかしいからである。

シッドのなかにも、ゲルマン的英雄の荒々しい狂暴性の片鱗をのぞかせては

いるが、彼の人間のなかにひそむ深いヒューマニズムときん度によって、それは十分にあがなわれて余りあるごとくに写されている。灰の下に、素朴な時代の埋火を、いまだに赤々と燃やし続けているかのごとき、不詳の作者の手になるこの「エル・シッド」を読めば、主人公およびその家族たち、それに秀れた輩下の戦士たちの心のなかにも、キリスト教的精神が浸透しておることがわかるのであって、詩的構成とその雰囲気についても同じことが感得できる。

騎士道なるものも、つまりは社会的約束であり、普遍的慣習として誕生、成長していったといつてよからうし、そうすると、もっとも重要なものはその精神と性格に存するので、その他の規律とかおきてとかいったものは、従なるものと考えるよい。要するにそれは、11世紀以降ヨーロッパの上層にひろがった精神的風土のあらわれだったのであり、一方では、過ぎ去った時代の剛き不屈の偉大なる人間の子孫たちによって伝ばされ、また、日常習慣の洗練化によって誘発された、優美なるもの、品格あるものへのあこがれをきずきあげるにいたるものであり、他方、キリスト教的精神から引き出される人間的感情のもっとも深奥なるもの、靈的なるものへの傾倒を生み出さんとするものである。このようにして、前の時代の、殊に戦闘時におけるモラルは、正義を後だてとして新しいモラルに代えられていったのであった。11世紀及び12世紀においては、騎士は全くの典型として、高貴性のためにある存在をもたらす。騎士は、もともと、封建的家庭の次男以下のものがこゝろざしたので、彼らには土地も城も与えられず、劍一振を持って戦いのことに従い、あるいは宮仕えして、城さいから城さいへ、宮廷から宮廷へと居を移していたのであった。彼らには立派な武具をそなえるほどの余裕もなかなかなく、一人前の騎士として必要欠くべからざる馬やたてでさえ、これを手に入れるには余りにも乏しかったのが実情であったが、しかもなお、供奉の者として本来の役目を果さねばならなかったのである。たまたま、金があつたり、家系がよく家財があつたりでこれを手に入れることのできるものは、儀典などのある場合、年とともに、立派な甲冑を身につけた騎士として現われたりしたものゝようである。のちに、ヨーロッパ一円にわたって、ほとんどおなじ態様の個定化をもたらせたのは、

その形式尊重の結果であつた。騎士たちの間から生れた高貴性といったものは、血族からくるそれとは、またおのずと異なつて、相続で受けつがれるわけのものではなく、みずからの努力精進と功績によって得られた権威をそなえていたことは当然で、それは純粹に個人的の高貴であり、同時に理想であつて、それはまた、限られた人間に属するものでは無論なく、ひとつのモラルを守則として厳しく守り通したものにかゝやく属性であつたのである。いゝかえると、名誉、忠誠、廉直、誠実、自由、親切、勇氣などの美德の実践者のものであつたのである。

IV

16世紀のイスパニヤは騎士物語の全盛期を見るが、前述した回国の騎士そのものが形をとゞのえるのは、国土回復戦争の刺げきによるものであろうが、15世紀の初めからであつた。従つて、イスパニヤ文学に最初にロマンセが現われるものも同じ時期で、武勲物語歌が消えうせた時代に続くのである。詩の文学のジャンルの意味でのロマンセという言葉は、15世紀以前には何らの資料も残していない。たゞ、しるされたものとして最初に現われるのは、当時の政治的事件に積極的に関与してその名を得たサンティリヤーナ侯（1398—1458）のものした書簡中においてある。彼は、軽べつした調子で、その作者を「最低の詩人」ときめつけ、それを読むものをば、「奴隷のごとき下賤の徒輩」などと断じている。そこで、名前のわかっている作者の手になる最古のロマンセはというと、「ストーニーガの詩歌集」のなかに出ているカルバハールという詩人のものした二篇である。

こゝで、ロマンセについていうと、言語学界のせき学で、現にアカデミアの長たるメネデス・ピダルは、こう定義している。「それを簡単にいえば、短詩型の叙情風の叙事詩で、舞踊の際とか、娯楽的遊戯ないしは、共同作業のための人々が集つた際などに、楽器にあわせて歌われたものであつた。」つまり、ロマンセの特長とするところは、長い間に丹念に、古い民衆的叙事詩の記憶を収集して、その上に躍動的な生命を与えてきた点で、これは、中世紀にお

いて他の民族に見出すものと著しく類を異にするものである。ロドリゴ王、ベルナルド・デル・カルピオ、フェルナン・ゴンサーレス伯、エル・シッドなど、古い英雄詩に出る主要人物は、多かれ少なかれ、鑄形をかえてロマンセのなかに生き残り、忘却から救われているのである。これをたとえば、14世紀のフランスにおいては、もはや古い叙事詩のすぐれたテーマは消滅していたことにくらべれば、思いなかに過ぎるものがあるろう。

武勳物語歌たる初期の叙事詩が、民族の心のなかに老化しはじめたその期にあたって、ロマンセがイスパニヤにおこったのであった。要するに、ロマンセは、武勳物語歌として総合されたものゝ断簡片語から成っていたと思える。武勳物語歌といえば、前に書いた通り、わが国のいわゆる語部に相当する、すなわち生々躍動の調子で旧辞印象を伝える歌い手（語り手）に対して、それを承けて記憶にとどめる聴き手があつて、各種物語が、口頭で世々代々に保存伝承されるのみならず、その内容や形式が、時にはまたその双方が、多かれ少なかれ改変されて、原形から離れていったであろうことは、他の国の伝承文学と余りへだゝるところはない。ロマンセが、特別に民衆的文学のジャンルとして考えられるわけは、それが公共の場で歌い手に歌われたということ、その際、聴き手のひとりひとりの耳の働きと、想像力に同じように訴えなかつたことは当然で、漸次代をかさねて繰り返されるうちに、あら手の暗しう者は、きいた時の印象のまゝに内容と形式をかえていき、ロマンセ中の一そう話を、あるいは切り離したり、あるいは他のロマンセに付け加えたり、また、省略あり概括ありで、想像的潤色がほどこされたことも、ありえたことである。このようにして、初めは口伝で、のちには紙片に書きとめ、17世紀末まで保存されたロマンセを集めたものが、すなわちロマンセ一ロである。この無名の古人より出でたる詩の集大成と、素材と形式の経緯からできあがつた布織は、そのまゝで十分に国民的性格を、総体として持っているわけである。

以上は、イスパニヤの騎士道精神のえん源につながる文学的表現の概略である。そこにあらわれる人物はすべて、同じ国民的心情の基盤に置かれ、またうつし出されるべきはずのもので、彼らは、中世紀の騎士道精神の偉大なる理想

の嫡出子であると同時にまた、国土回復戦争というイスパニヤの精神的環境の下にあって、明らかに独特の相ぼうをうつし出している。歴史の上で、また伝説の上で偉大であったイスパニヤのこれら騎士たちは、少なくとも根本的様相では、その発生に見るも、また発展に見るも、外部からの影響はうけていないようである。騎士道という普通的理想の、イスパニヤ人的考え方から、それは生れたものなのである。

しかし、あらゆる種類の騎士道精神の反映が、諸外国殊に隣邦フランスにあらわれていたと同様、イスパニヤにも浸透していたのが、当時の実状であった。その潮流の結果が、この国に、主として散文による物語文学を生み、しかも、前に書いたイスパニヤ本来の騎士詩と併存していたのである。こゝにいう物語文学も騎士物語のことで、13世紀末にこの国に生れているが、その最初の痕跡は早く、すでに賢王アルフォンソ10世の治世下に求められる。これらの物語本について、メネンデス・イ・ペラーヨは、いみじくも、「それは、わが国民芸術の自然発生的産物ではない。それは、おくれて根を下した異国の植樹で、その一時的の盛んな繁茂は、当時の時代的環境によつたものである。」という。それら物語本も、ついには、この国の風土に馴化するのである。

この物語文学の最初の作は、13世紀に書かれた「アレキサンドル物語」で、12世紀末、ラムベール・ル・トールの手になるフランス語本のイスパニヤ版とでもいふべきものであった。偉大なるこの征服者は、作品のなかでは、中世紀風の騎馬にまたがって現われ、騎士道の訓練をへて、剣をもった多勢に付き添われている。その師アリストテレスはスコラ哲学の先生、アテネの大雄弁家デモステネスも出てくる。この書物が、実にイスパニヤにおける騎士物語の先駆となるのである。全く、アレキサンドルは、中世紀的騎士の姿で描かれ、シャルル大帝時代の英雄としてうつされているみたいである。前に引いたウルフの言葉を、こゝでも借りると、「それは、騎士道的人間としてのイスパニヤ人の肖像を、われわれに見せてくれるものである。」ということになる。

他の騎士のタイプとしては、賢王アルフォンソの偉大なる学問的主導力ではじまる環境下に生れた「偉大なる外地征服者」と「騎士シフェール」である。

前者は、やはり、フランス語の原本をもとにして、十字軍の歴史的大事跡のイスパニヤ文学の反響を示したようなもので、19世紀にドイツの作曲家ワグナーが、歌劇「ローヘングリン」を作って民衆化して有名になった物語詩、後者は、もつとも古い時代の騎士物語のひとつと認められている。

中世イスパニヤの騎士道精神は、無論、文学作品として表現されているにとどまらず、精神的な面での教育指導にも影響を及ぼし、たとえば哲学の分野では、思考の態度にそれが汲みとられるのである。マヨルカ島出身のライムンド・ルーリオ (1235—1314) のごときも、イスパニヤ民族のもつこの騎士道精神をは持して、著述と真理の宣布にその活動的な生涯を終えている。わが国に最初にキリスト教をもたらしたイスパニヤ人フランシスコ・ハビエールの師として余りにも有名なイグナシオ・デ・ロヨウその人のなかに、もし、一個の騎士たる軍人が、聖徒に変わらうとした姿を見るとすれば、彼ライムンド・ルーリオの場合には、一人の騎士たる吟遊詩人が、尊者に変わらうとした姿を見ることができよう。その教養、著述、思索的態度などのすべてから、騎士と吟遊詩人とが、彼のなかに同居して死することのなかった彼の内的生活を、われわれは知るのである。名家の子息として教育を受けた彼には、武事と、文事すなわち当時の作詩法がほどこされたのだが、彼の教訓的著作「騎士道解放論」は、老騎士と若輩の従者との対話という形を通して彼のうちにある騎士道精神を、もつとも確証づけているものである。13世紀のもつとも偉大なる文学者、思想家、宗教家であった彼ルーリオは、結婚生活幾年かにして、フランシスコ会に入り、余生を教外者の改宗のために力を尽したのであったが、彼の思索的態度には騎士道精神が横いつしている。知識を精神的武器と観念し、次々に彼はユダヤ人を襲い、回教徒を襲って、彼らのたましいを征服していったのである。闘志で充たされた彼の哲学は、キリスト教の敵とぶつかると、彼らと苦患を共にしつつ、遂には勝利をものにするのであった。その主著「大芸術論」は、実際、護教論の立場に執し、かつ、東方の異教徒のたましいに対する教会の先制攻撃を用意したもので、一大とりであると同時にまた、巨大な弾薬倉庫の感を呈している述作で、これは、十字軍の戦法を彼の心情のなかに昇化し

たものであったのである。

騎士道精神を興味深く表現したものでは、賢王アルフォンソの甥のドン・ファン・マヌエール（1282—1348）の手になる「騎士と従者の書」がある。すでに隠生せる老騎士と武装せる年少の従者との間に、騎士道の真髓について、これを伝授する場面が盛られている。

いったい、それらしい騎士物語の文学的ジャンルが現われるのは、15世紀の交であるが、多くのもののなかで、真に読まれる価値あるものとしては、「アマデウス・デ・ガウラ」がある。この物語は、卓抜なる文体と、滋味のある冒険が、自然な趣向で運ばれておるのだが、この物語の重要性は、他のイスパニヤ文学不朽の名作たる「ドン・キホーテ」につながる源泉であるという点である。「アマデウス・デ・ガウラ」につぐ物語を求めるなら、ドン・キホーテと村の和尚とがその優劣を論じているように、「パルメリン・デ・イングラテラ」をあげることができる。作者はルイス・ウルタード。

ところで、16世紀の初頭に及ぶと、ヨーロッパの読書界はあれほどまでに風びした「アマデウス・デ・ガウラ」も影をひそめ、騎士物語は落陽に包まれて、ヨーロッパの空から消えかゝっていたのである。だから、騎士物語の全盛は、せいぜい100年かそこらであった。それは、はかない当時の文明理想の衰退をくいとめる最後の力でしかなかったように思われる。はたしてそこに、崩れかゝった騎士道的理想の芸術再現の可能性が残されていたかどうか、ということになると、先ず考えられることは、古い騎士のなかにあるたましいを温存し、すでに非現実的となった気随な性格そのものを墨守することであったが、しかしそのためには、特長的な点をうんと強調することが必要であったことは、いうまでもなからう。「アマデウス・デ・ガウラ」にも、それが表わされているのである。

騎士とその周囲を断ちきること、そこにも別の救いの道があったはずである。すなわち、皮肉、懷疑、滑けいなど。「ドン・キホーテ」の誕生は、こゝにはらまれていたといえる。

「ドン・キホーテ」が、世界文学の最高傑作のひとつであることは間違いない

い。だがそれは、いまだ書かれたことのなかつた、もつとも切ない小説だとも云えそうである。マンチャ村の郷士の愁いがおをもつて、騎士が再び世に姿を現わすが、その世たるや、ひどく冷たい現実世界である。たえず、同胞から、さいなまれ、あざけられ、侮べつされる。恐るべき狂気の奈落へと、人々のいちだんとはげしい高笑いのなかに、ついに騎士道的理想の世界は沈まんとするのである。その無残、冷酷をわずかにやわらげているものこそ、実はセルバンテスその人の、清らかにして情愛ゆたかな、理解と人間味に富む微笑ではないだろうか。にもかゝらず、「ドン・キホーテ」の読書感は、しばしばいわれるように、ハイネのそれとおなじく、笑いよりもむしろ涙をさそうのは、なぜか。

セルバンテスが、「ドン・キホーテ」を書いた意図は、当時の騎士物語に対する嫌悪だったことは事実相違なからうが、もともと、彼は騎士物語の愛読者であり、かつ賛美者でさえあつたのである。人間、由来笑止の一面が暴露されるにあらずんば、愛されることがないということが真実なら、けい眼、セルバンテスはまさにそれを見ぬいたのである。彼は、同時代までの騎士物語の主人公たちを嘲笑し愚ろうしたというよりは、むしろ、彼らとともに嘲笑し、愚ろうし去つたのであつて、セルバンテスは、「ドン・キホーテ」のなかに、先人たちの理想化の型を作り上げたことになる。騎士物語詩に出る偉大なる勇士たちの立派な手柄も、「ドン・キホーテ」生れては、悲劇的場面に変り、また、マンチャ村のこの郷士が、無法にももう想の生んだ巨人に挑みかゝろうと振いたゝんとするがごときに至つては、深刻な喜劇ですらある。ドン・キホーテが世に出たのも、要は、まさに死なんとする理想の復活のためだつたといえよう。それは、先人騎士たちのだれもあえてなしえなかつた超人的仕事であつた。そして、亡び行かんとする騎士の悲劇性も喜劇性も、こゝに存するのである。騎士道という人間的権威も、その全ぼうをドン・キホーテのなかにあらわしているのである。後述するロペ・デ・ベーガが、国民的、イスパニヤ的平面上に騎士道の理想を見んとしたのに対して、セルバンテスは、それを世界的、一般的な平面の上にとらえんとしたのである。

16世紀、17世紀にかけては、ロペ・デ・ベータとカルデロンの幕といってもよい。文芸復興に目覚め、近代のあけぼのを知るに及んで、伝説の叙事的素材は、こゝにイスパニヤ古典劇として生れかわる。そして、イスパニヤ古典劇は、前記二者によって展開されていくのである。

ロペ・デ・ベータは、「自然の怪物」と称され、戯曲はもちろん、叙事詩、叙情詩、小説、歴史と、その行くとして可ならざるなき才能を存分に発揮した作家である。彼の生涯そのものも、小説のような冒険と情熱でつらぬかれている。その知識も、神学、哲学、法学、美術、自然科学と、当時のイスパニヤにあった学問は全部吸収していた。天才に神話的伝説は付き物だが、彼も5才で詩をものし10才で訳詩をしたとか、13才で脚本を作り、朝から昼までの間に戯曲一本を書いたとか、色々にいゝ伝えられているが、ともかく2,200篇の作品によって、イスパニヤ、いな世界文学史上に異彩を放っている。彼の本領は何といっても戯曲にある。それは25部に分けて出版されたが、9部以後は自分で編集印刷にたずさわったといわれ、今日、この貴重な文献の一部がマドリッドの宮廷図書館その他にちらばって残されている。

彼の劇中には、各種の所作を通して、騎士道的素材と靈感が数多く働いていることが看取される。騎士物語は無論のこと、多岐にわたる彼の神秘劇、古典劇、異国物、さらに民族の風俗習慣を扱った一連の作品についてもおなじこと、文芸復興によって若返った騎士道精神が、力強くその劇中に脈うっており、そこで、われわれは、他の文学作品中に久しい間、全く忘れられて眠っていた中世紀の精神的価値にまみえることができる。ペルシヤのシーロ、ボヘミアのオトカール、皇帝オトーン、モスコビヤ大公、フェルラーラ公など、ロペの喜劇にあらわれる歴史的人物は、どこからつれてきたものであれ、すべてこれ、騎士道精神の再来として躍如たるものを見せ、昔の国民的物語の英雄たちのなかには、ひとりの悪人をもつくらず、作者と同時代の人間のごとくに、彼らに感じさせ、考えさせ、語らせている。

ペドロ・カルデロン・デ・ラ・バルカも、ロペとおなじくマドリッド子。同地のイエズス会経営の学校に学び、のちサラマンカ大学で神学を修めた。1637年

には、サンテ、ヤーゴの騎士となり、1640年から3年間、カタルーニヤの戦いに出た。1651年には司祭に任ぜられ、しだいにフェリーペ4世のちようを得る身になった。マドリッド市当局はまた、毎年、彼に聖さん劇を書いてもらっていたといわれる。宮廷詩人として彼はまた、王室の劇場のための戯曲や、サルスエラとよばれる一種の音楽的輕歌劇をも書いていた。今日残っているのは、120篇の戯曲と80篇の聖さん劇と、その他のものである。カルデロンは、その構想においても、その豊かにして微妙な表現的筆致においても、また人物の型の創造にしても、遠くロペには及ばなかったが、彼の戯曲は、広範な人々読まれ、多くの模倣追随者をも生んだ点で、彼ほど久しく劇壇に君臨したものは、かつてなかったほどである。そして、やがて17世紀のロマンティシズム時期に際会すると、誰よりもさきにドイツに復活するのである。彼は、時代の民族の理想を表現した理想主義者であつたからであり、ロマンティストに触れる純粹さが、そこにあつたからであらう。

カルデロンの作品のなかに輝やかなしい頂点を見せているイスパニヤの古典劇は、たしかに外来の要素を混えぬ国民的天才の手になる数少ない産物のひとつである。また、ロペの全作品にあふれている中世紀的騎士道の面影は、その度合に相違はあるが、彼の劇を形成する要素ともなっている。彼らの生きた時代は、17世紀のイスパニヤの国民精神を支配した理想と熱情が、社会の上層に集中し結晶していた時であつた。戦闘的で帝王派的な、カトリックの神学的理念、神聖にして侵すべからざる王への従属的存在と考えられた人間と君主制への賛仰、あらゆる法則にまさる倫理的規準の表現としての名誉という觀念のなかに、人間のいつさいの精神的、社会的生活を吸収包摂すること。——ロペの劇に見られるこれらの特長は、すばらしい表現力をもって読者に迫ってくるのだが、ロペをもしも、国民的詩人とよぶなら、カルデロンの方は、前にも述べた通り、宮廷詩人ということができるのである。ロペと違ってカルデロンは、宮廷機礼の要求するところに従つて、その人物とその問題を処理し、彼の作品はひとつの型にはまらざるをえなかった。そこで彼の作品は、当時の国民生活の全ぼうを呈供せず、国民的良心の委託機関たる宮廷の、いゝかえると、襲い

来った文芸復興の嵐に抗して、騎士道の古いモラルを執ように墨守する限界内にとどまったものになっている。「カルデロンは、さながらにして、古いイスパニヤであった。光と影、偉大と欠陥が混淆し、壮麗豪華と、わが国衰微の夢と、空ごとくを共にもち、敗北すれども、負けず、びくつかざる国民的誇りを内にし、宗教心と君主大事の心根をおなじし、正義と自由の心をそなえていた。要するに、落ち目にはなっても、そこなわれることのない伝統の威信をもっていたのである。」とは、メネンデス・イ・ペラーヨの評言、肯けいに価しよう。中世紀的騎士道精神からいえば、カルデロンの劇には、ロペのごとく、古い民衆的叙事詩の素材が用いられずして、近代のなかにそれがうけつがれているのである。

さて、18世紀に入る。この世紀は、騎士道精神のイスパニヤ文学にとっては、危機だったといえる。しだいに増大してくるフランス文化全般の影響下に立たされて、騎士道の文学は、中断の道に立ち至るのである。イスパニヤ文学自体の発展の休止を、それは意味する。そして、自由かつ達な繁栄の時代に終止符を打って、自己の価値の再審査の時期がやってくる。国民精神の自己凝集の時代が終って、外来思潮に眼を開くことになる。国民的創造が止り、批判が始まるのである。

イスパニヤ人の独創性や人間的形成には、それまで、ほとんど外来の影響をうけていなかった。17世紀にも、この国の英雄的叙事詩の発展、完成に役立つほどのフランスからの影響はなかったのだし、イタリアについても同様であった。隣邦からの影響がとうとうとして浸入、見さかひもなくこの国文学のあらゆる分野を壊しにかかるのは、全く18世紀に入ってからのもので、以降、イスパニヤ国内に生れるフランス風の模倣が主潮となり、自己のものとなっていく。すなわち、エンサイクロペディストたちによって揚言されたコスモポリタンの理想を名とするフランス国民の考え方、感じ方を、容易にはうけつけようとしなかったイスパニヤの伝統的精神のからが、こゝで破られることになるのである。由来、イスパニヤ精神は、しごく激越にして、本能的、自己発動的で、内部に何か狂的なものを隠し、ひとつの独創的表現のなかに自己表白を見出さ

んとする。これに反して、フランス精神は、よくいわれるように、いんぎんにして反省的で、洗練されている。十分なる理性のさゝえと、古典主義の理想を吸収した急進的危機意識の下にあって、それは、大きく伸長の機に際会していた世界の、あらゆる方向に窓を開かんとしているのであった。

17世紀のイスパニヤに、もういちど眼をひるがえすと、それは、15世紀、16世紀の間に実現された巨大な創造的発展の後、すべての面で枯渴をうったえていた。凋落の期にあたって考えられたことは、前記2世紀の間に膨脹した創造的精力のばかばかしい浪費の生活であった。イスパニヤ国民の消耗された精神は、ピレネーを越えてくる思潮を、終始欣然とうけいれることになるのも当然であったろう。この強大な外来思潮の襲来による犠牲は、こゝにあらためて述べるまでもなく、中世紀的叙事詩が意味するものであり、それまでイスパニヤ文学の独創性の骨格となっていた英雄精神であり、騎士道精神であったのである。イスパニヤ国内では盛んにフランス物の翻訳、模倣がおこなわれ、文士たちの間に熱心なフランスかぶれを生んだ。しかし、こゝに国民精神の反動を誘発しなかったのは、以上のような外来思潮の受入れが、必ずしも全般的なものでなかったからであろう。ともあれ、その作品に、イスパニヤの騎士道精神が生きていたこの国の偉大なる過去の作家たちの面影が、完全にひっそくするまでに至らなかったことはあらそえない。当時の知識層のなかにも、時流に抗しつゝイスパニヤの伝統精神となっていた騎士道精神と、もうひとつ、神祕精神のことを、しばしば問題にしていたことをうかゞい知ることができるのである。なかんずく、注目されていゝのは、18世紀におけるイスパニヤ思想界の代表的人物であったフライ・ベニート・ヘロニモ・フェイホオとフアン・パブロ・フォルネールの2人であり、彼らは当時のフランス的風潮に対する頑強な敵手であった。前者は、文学的思想においてロマンティズムの真の先駆者であったし、後者はまた、当時のベダンティツクな連中の無智さかげんに痛撃を加えている。そして、早くから、ちゆうちよすることなくイスパニヤの古典劇を批判した彼フォルネールも、晩年にはロペやカルデロンに賛辞をしるしている。

詩の方では、フアン・メレンデス・バルデース、ガスパール・メルチョール・デ・ホベリャーノス、マヌエール・ホセ・キンターナ、ニカシオ・アルバレス・デ・シエンフエーゴス、フアン・ニカーシオ・ガリェーゴ、トマス・デ・イリアールテ、フェリックス・マリア・デ・サマニエーゴ、レアンドロ・フェルナンデス・モラティーン、その他が、過去のイスパニヤの騎士道的伝統と、はっきりと決別しているに反して、ホセ・デ・カダルソが、その詩作「しずかな夜」でロマンティシズムを示し、伝統に執する活力を見せており、ニコラス・フェルナンデス・デ・モラティーンなども、英雄的、騎士道的内容の詩作をものして、古い叙情風の叙事詩の脈絡を蘇生せしめた。フランスの古典劇の模倣を無数に生んだ18世紀のイスパニヤ戯曲のなかにあっても、カンディド・マリア・トリゲーロスやディオニーシオ・ピリャヌエーバ・イ・オチョーアなどによる古い喜劇を素にした作品中には、騎士道精神のひらめきをとらめていることを指摘しなければなるまい。

V

古典主義に対するロマンティシズムの理解は必ずしも単純と思われぬし、また、こゝにそれをしるすこともないのであるが、すくなくとも、その表現法として一般的には、何らかの驚き、異常、何か予期せざるもの、異種外来のことを求める心理を意味しよう。ところが、イスパニヤについてはこれは必ずしも当らない。この国にあつては、広い世界的なものゝなかにおけるイスパニヤ的なものゝ新しい価値づけとして理解さるべきだし、そのことはすなわち、ヨーロッパ全史における精神文化の最高の典型としての、国民的騎士道の再発見ということになるのである。真正のイスパニヤ的なものへの回帰は、けだし、感情的な反動や、単なる変化愛好の結果によるものでなくて、良識と反省の道程をへて辿りつくものでなければならなかつたわけである。

ロマンティシズムの起源は、いうまでもなく英国およびドイツに求められるが、ヨーロッパにロマンティシズムの運動を形成せしめるに至った知的ならびに感情的な要素は、多かれ少なかれ、19世紀のイスパニヤにもあつた。東方諸地

域、地中海沿岸諸国への思慕、中世時代の理想主義的高揚、民衆的、伝統的なものへの傾倒などがそれであった。そこで、かつては、けんらんたる黄金世紀の文学の花を生んだ彼の中世紀的騎士道の理想を、再び、実らさんとすることになるのである。英国、ドイツなどのロマンティシズムの古風な傾向にくらべると、イスパニヤ文学のなかには、自由主義的、個人主義的、およびフランス風の革命的思潮さえもが強く入りこんだ。そして、ともかく、この新しい文学運動は、文人墨客の詩藻を大いに高めたのである。由来、中世紀の精神は、キリスト教の伝ばせるところに従い、その潮流を流したのであり、従って、それを受け入れる諸国個有の国民的感情からくる独自の形態をおびたキリスト教的意味が出ることになる。そこで、ロマンティシズムも、叫び異教的古典主義の考え方とは正反対のキリスト教的思考を展開する。

対象をギリシャ、ローマの古典芸術に求め、その傾倒から生れた文芸復興も、時代とともに盲従的な模倣の潮流のなかに退潮を来たさんとする。このような結果にすくなからず貢献しているのは、ヨーロッパ諸国民の歴史的な起源についての、いつそう正確にして深い当時の研究であって、それは国民精神本来の純粋性とか独自性とかを明らかにするかのごとくに考えられ、人々の国民文化の伝統熱を目覚めさせ、かつ文学的創造の希望をもたらせたのであり、このようにして中世紀的騎士道精神の復興運動があらわれたのであった。

1810—20年および1823—28年の間の、専制的政治体制のため、イスパニヤの知識人グループは英、仏、伊などの諸国へ亡命するが、やがて間もなく帰国するに及んで、亡命先からもたらされた各地のさまざまな運動が喧伝され、ロマンティシズムはイスパニヤ国内では予想以上の混とんとした様相を現わした。が、フランス革命より生じた破壊的思想にくらべると、この国では、むしろ、復古的ロマンティシズムの道がひらかれて行くのである。つまり、し烈な教権反対と、急激な思想解放の原理が、純粋な伝統主義や古い宗教的感情の高揚と同時に説かれたのであった。ロマンティシズムの開花、騎士道精神の文学的復活も、要するに、イスパニヤ文学のなかに流れる国民精神の深さと、執ようさのいかに根深いものであるかを証するものであろうが、実際、イスパニヤ文学

はロマンティシズムの来る前にすでに十分ローマン主義的だったといえるのである。ロマンティシズムにとっては、またとない土壌をそこに得て、伝統的なイスパニヤ精神が姿をあらわしたのである。19世紀から20世紀にかけて、ローマン主義を通して、騎士道的理想の跡をイスパニヤ文学に残した作者および作品となると、その数の多きを嘆かねばなるまいので、こゝでは、その伝統を保つた偉大なる3人、ホセ・デ・エスプロンセーダ(1808—42)と、リーバス公アンヘル・デ・サアベドラ(1791—1865)と、ホセ・ソリーリャ(1817—93)の名をあげるにとどめ、1818年にはじめてスコットなどロマンティシズムの翻訳小説がバレンシアで出版、1821年にはまた、「ヴェルテル」も翻訳、出版されていること、1823年には雑誌「エル・エウロペーオ」が創刊され、同誌上にロマンティシズムをめぐる諸論文が盛んに掲載されたことを終りにしるしておきたい。

Bibliografía

- Manuel de Montoliu : El alma de España y sus reflejos en la literatura del siglo de oro
 Ramón D. Péres : Historia de la Literatura Española e Hispanoamericana
 Américo Castro : El pensamiento de Cervantes
 Ricardo Cobos : Síntesis de Literatura
 Menéndez y Pelayo : Estudio de Crítica literaria
 J. D. M. Ford : Main currents of Spanish literature
 Gerald Brenan : The literature of the Spanish people
 Jean Camp : La Littérature Espagnole
 (会田由訳, 白水社版 クセジュ文庫)